



防災教育チャレンジプラン中間報告資料

「伊豆半島沖地震から学ぶ～今、そしてこれからの防災～」

南伊豆町立南中小学校

吉田 祐子

〈今までの取り組み〉

「中木の地震(伊豆半島沖地震)について調べよう」

1 文集「大地は裂けて」を読む

父母が本校の小学生だったという子どもが数名おり、8時33分に地震が起きたときの教室の様子、避難の様子を詳しく聞いてきた。また、祖父母をこの地震で亡くしている子どももいたので、身近なこととして受け止めていた。

2 身近な人に聞いてみよう

- ① 家族に聞く
- ② 近所の人に聞く
- ③ 本校の栄養士さんに聞く



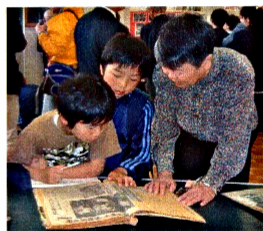
山がぐらぐらと動いたという話に驚いた。栄養士さんの1歳の子どもは、家の下敷きになり、奇跡的に助かったこと、余震が続き、しばらくの間、夜は安心して寝られず、枕元に懐中電灯を置き、いつでも出られる服を着て寝ていたことなど、話に聞き入っていた。

3 慰霊祭に参加しよう

毎年5月9日に被害の大きかった中木地区の公園で慰霊祭が行われる。その慰霊祭に5・6年生のほとんどの子どもが休日にも関わらず参加した。本年度は、伊豆半島沖地震から30年という節目の年で、資料の展示や起震車体験なども行った。東京など遠方からわざわざ来ている被災者の家族に直接話をうかがうことができ、貴重な体験となった。

- ① 被災者の人に話を聞く
- ② 当時のビデオ・資料を見る
- ③ 起震車体験

コミュニティセンターで、当時の新聞記事綴ったスクラップブックを見ながら、説明してくれた。



中木の公園にたつ慰霊碑。慰霊碑の裏には亡くなった方の名前が刻まれている。その中には2歳の子どももいた。

4 郷土館で調べよう

- ① 南伊豆町の被害の様子を役場の職員に聞く。
- ② 当時の新聞を見る。

役場の方が、当時の町の被害について教えてくれた。海のそばの砂地の地区が建物の大きな被害を受けたそうだ。液状化現象が起きたからだと思う。





5 地震調査隊

- ① 聞き取り調査の仕方について話し合う。
- ② どんなことを調査するのか決定する。
- ③ 5年生の実態を調べる。
- ④ 自分の地区を回り、調査する。

このおばさんは、水が一番大事だって言っていた。今でも毎晩寝る前に、ポットやおけ、やかんなど、すべてに水をいっぱいためているそうだ。すごいことだと思った。



このおじさんは、3人の子どもの小さいときに地震がきて、一番下の子どもが茶だんすの下敷きになったことから、茶だんすを固定しているそうだ。今でもその恐怖は忘れられないと言っていた。枕元にも倒れそうなものは置かないようにしているそうだ。



6 これまでの成果と今後の課題

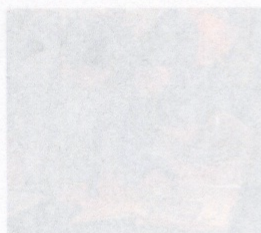
地域の人とのふれあいを通して学ぶことが多く、自分たちの問題として今できることは何かを考え実践していこうという意欲が生まれてきた。私たちの学校の置かれた環境を生かし、田舎だからこそできる近所の人との関わり合い、助け合いがいつでもできるように、普段からあいさつを交わし、つながりを大事にしていきたい。

地域防災のときに、避難の仕方を子どもが親に指示したり、家の持ち出し品を子どもがチェックして、足りないものを教えたりという表れが出てきた。また、町の広報紙「みなみいず」にも子どもたちの取り組みが紹介されるなど、子どもたちの防災意識が周囲の大人を巻き込む防災活動になりつつある。

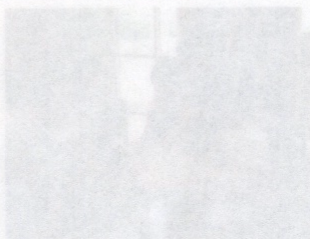
今後、地域への発信をどのように行っていくのか、子どもたちと話し合いながら進めていきたい。



「地震が来たときに、おうちの中にあるものを、おうちの中に入れておく。おうちの中に入れておく。」



「地震が来たときに、おうちの中にあるものを、おうちの中に入れておく。おうちの中に入れておく。」



「地震が来たときに、おうちの中にあるものを、おうちの中に入れておく。おうちの中に入れておく。」

